

庭 其の

「石を組む」

石のかたちは千差万別。それぞれに表情があり個性があります。選び方、扱い方、組み方で様々な景観表現が可能となります。その組み方の一つの技法で、石組みの基本となるものに七・五・三石組があります。それは、古来奇数はめでたい陽の数とされていた為だとか。

しかし、まれに在る二石組は、大きさ、形の異なる石で主従関係を持たせる「人」という字になるよう組む事が良いとされています。ちなみに七・五・三石組の代表作が京都竜安寺の石組です。



竜安寺の石庭

一建落着



準防火地域の木造住宅です。厚さ30mm以上の屋根裏板ならOKです。



K邸（竹田・田町）

Y邸（竹田・古町）

玄関周りは“なぐり風”に



何か？と思われたでしょうが、これはホームエレベーターの入り口です。今では随分とお求めやすくなりました。もちろん、“あの”メーカーではありません。

～ お知らせ ～

このたびホームページを開設致しました。『和』や川野和男の版画も掲載しています。一度ご覧になって、ご感想をお聞かせ下さい。

アドレスはこちら

<http://www6.ocn.ne.jp/~k-kawano>

発行人 川野和男
編集 川野組内
家造り匠の会
〒 竹田62-2416
メール tkk22@theia.ocn.ne.jp

和

なごみ

桑

友人は

その辺に生えている「葉っぱ」は みな食える
煮てん焼いてん食えんのは テンプラにすればいい と

春から初夏にかけて
柿の若葉 茶の葉 トマトのワキ芽はうまい
美しいのは藤の花房 風味は桑の新葉 と

桑

晩春 淡い緑色の地味な花を付け
夏 赤い実が濃い紫色に熟し 触るとほろっと落ちる
子どもの頃 口の周りを紫にするほど 頬張ったものだ
葉は養蚕に 材は家具に
樹皮は紙の原料に使っていた という
自然の中の 暮らしと住まい

旬の版画



南登山口から竹田の花火を観た

ピカ ピカッ し～ん……
ピカッ ピカ ピカ し～ん……

花火は やっぱり「ド～ン！」
がなくちゃ

ちょっと季になるお話 漬け物 其の一 梅干し

一晩水に浸した梅をざるに揚げ、塩をまぶし、丁寧に容器に漬け込んでいく。

梅干しを漬けるのは本当に久しぶりだ。大分国体が近づくに連れて益々繁忙になるソフトボール協会の仕事に時間を奪われ、漬けるタイミングを逃し続けていたのだが、「ちょっとお父さん、ボクの毎日の弁当に梅干しが要るんよ。それに、姉ちゃんは受験生なんよ。今年は漬けちょかんと菅原道真さんに嫌われるよ。」と妻からプレスが掛かった。



《“道真さん”や？お前、あのひととどんだけ知り合いか？。それに梅干しが道真公の好物なんかどっから聞いち来たんか？。》だが、山の神の祟りの方が遙かに怖い私に選択の余地はない。渋々腰を上げた次第であった。

私の梅干し歴は今年で丁度十年だ。第一作は赤じそを搾って色を付けた正統派のそれであった。下漬けから少し経った頃、菜園から摘んできた赤じそを、本に書いてある通りよく揉んだ後に透明な梅の漬け汁をかけ、更に揉み上げると、きれいな赤い絞り汁がボールに滴り落ちた。その朱のなんと鮮やかだったこと。土曜日で、お昼には小学校から帰ってくる娘にも見せてやろうと、わざわざ作業を中断し待っていた事を思い出す。

その後は、“面倒臭がり”の性格が災いし、専ら白漬け一筋に突っ走って来たが、あの時、梅酢の朱と一緒に感動してくれた娘も高校3年生。

ここは、道真公が梅干し好きだったことに懸けて、面倒でも赤じその梅干しを漬けることにしよう。

もちろん梅雨明けには、三日三晩の土用干しもちゃんとやりますとも。決して手は抜きません。何せ、初春の美味しい梅干しと娘の受験成功の二股が掛かっているんですから。

里山探訪 やまの恵みたち

このどデカイエノハは、神原川で手づらまえた(手で捕まえた)ものです。

太公望ではありませんが生き物を見ると、どうも血が騒ぐ人種のようなです。天然のエノハがこれ程に大きくなるには、かなりの年数が掛かっているのではと思います。

今日、環境問題が取り上げられている中、まだまだ地元には豊かな自然が残されている事を感じます。



休景たいむ 「いっぷく」時間の一枚



和No.21で紹介した田町通りの北側です。

城下町の持つ“薨の美”は、この一・二年で整備され、もっと良くなることでしょう。

惜しむらくは、電線が・・・

知っ得？納得！ こんな所に こんな物

これは、竹田市街地に在る商店の2階部分です。整然とまとめられた左右対称の建物に惹かれ、今回取り上げました。



左右の少し突き出た部分に施された細工は、当時の左官職人の手によるものでしょうか、綺麗に仕上げられています。

新しい建築の普及と共に建築様式も変化し町並みも変わっていく。それは仕方のないことです。

それでも、このような古い一部分が残されていると、何となく郷愁を誘われます。

時代、時代の建物が、混在している竹田の町並み。

そこに惹かれてくる人も多いのではないのでしょうか。

